

旭川医大病院ニュース

就任にあたって

産科部長 石川 健男



教室を担当させていただきます。初めの、人も居ない、物もない時代に御苦労された清水教授には申し訳ない程現在の教室は充実しております。

昨年七月旭川医科大学長となられました清水哲也教授の後任として、五月十六日付で産婦人科学講座を担当させていただきましたことになりました。札幌に生まれ育ち、昭和四十二年北海道大学を卒業致しましてから二十五年が過ぎようとしております。旭川に参りましてから満で十五年になるところですので、医師となりましてからは、母校である北大での生活より旭川医大での期間が長くなりました。萌芽の時から、悲喜こもごも共に歩んで参りました当

産科部門ではハイリスク妊娠を中心に妊婦管理を徹底し、最先端の超音波パルスドップラなどの技術を駆使して、子宮内発育遅延などの胎児異常の診断管理を行っており、胎児の形態異常はもとより機能異常の出生前診断も年々効果をあげております。これらの情報をもとに、出生後は小児科新生児班との緊密な協力を得、周産期離病率、死亡率の減少を目指しております。婦人科におきましては対癌協会などの協力体制の中で、子宮体癌、頸癌の早

題字は吉岡元病院長
〔編集〕
旭川医科大学医学部附属
病院広報誌編集委員会
委員長
八竹教授(泌尿器科)

期発見、治療を行っております。火、木の手術日は良性の子宮筋腫などから子宮癌の広汎子宮全摘術まで数多くの手術を手がけております。最近注目されております一般の癌検診では仲々発見されにくい卵巣癌につきましては、SODという新たな腫瘍マーカーの研究開発により、序々に早期発見の成果をあげております。進行癌につきましては、放射線科との密な連携のもとに再発および転移防止のため放射線療法を行うとともに化学療法なども併用し、より効果的な治療をスタッフ共々考えております。出生数の減少が際立つ一方で、不妊に悩む人も多く、道内でも最初にとり組みました体外受精における成績は特筆すべきものがあり、更に最近話題となりました顕微受精につきましても技術的な準備はすでに出来上がっております。この様に当科はその守備範囲を広く抱えておりますが、それに加え、思春期の女性の拒食症から来る月経

就任にあたって

事務局長 櫻野 豊



とつても淋しそうな印象を見る人に与えていた白樺の木も、さつきの風とともに濃緑の葉をいつぱいにつけ、さあシーズン到来だといいたげな表情を幹や枝から感じられる季節がやってきました。

お受けしたのが五月十八日だったと思います。テーマは、就任にあたってということですが、もともと原稿用紙にものを書くということ自体苦手で努力もしていない自分ですが(あまり自慢になりませんね)ご挨拶がたが一言述べさせていただきます。具体的事項は省かせていただきますが今新設医科大学が抱えている諸課題は日に日にその数を増しているような感じがいたします。大学改革推進という大きな課題から身近で日常的な課題まで数えあげればキリがありません。これらの諸課

附属病院広報誌編集委員会委員長八竹直先生から「旭川医大病院ニュース」への原稿執筆の依頼文書を受けました。異常、従来仕方がないとあきらめられていた更年期の様々な症状の軽減の治療など、ますます広がるばかりであります。幸い、旭川医大一期生を中心とした教室のスタッフは身も心も若く、エネルギーを十分に蓄えております。また、他科と比べて唯一、病人ではない患者さんが相当な数を占めているという

事実であります。生命力溢れるペビーの泣き声により、外来、病棟には明かるさがかもし出されます。未熟な私ではございますが、この教室の明るさとスタッフの若さに協力を願い、産科婦人科の発展に全力を尽くす所存でございます。皆様の御指導、御助言の程よろしくお願い申し上げます。

題は、それぞれのポジションであるいは合議体で地道にこなしていくか、以外方法は無いでしょう。大学行政も病院運営も、おいつめられた時代、だと云われております。このような、おいつめられた時代”に、どうやって、どんな思考回路で物事を解決していくのか、”今しかできないこと”何だろうか”、”今からできること”何だろうか”、これらを見んなで考えていけるような大学こそ将来に展望が開けるものと信じております。暗い話ばかりで恐縮ですが率直に云って今日の国家財政を背景にした予算編成では多くのものを期待することは到底無理であります。残された道は、大学として自らの努力により痛みを分かち合いながらどのようにしてこの事態をのりきるかでありませぬ。財政状況が窮迫し、国立学校特別会計予算も極めて厳しい状況に追いこまれてくる今日、本学でも新しい時代の要求に応えるその責任を果たすためにはエゴや殻を打ち破り広くあるべき姿を徹底的に追求し、学長を中心に全学的に一致協力して事に当たること、が今何よりも強く求められているはずであります。着任してまだ日は浅いので

みどりの日に 森林からの贈り物

四月二十九日の「みどりの日」に因んで、旭川営林支局から北海道の代表的な広葉樹であるミズナラ（通称ドングリの木）の鉢植と春を告げる代表的な草花でもあるサクラソウ科の鉢植の各一鉢が、本院に贈呈されました。

贈呈式は、二十八日のお昼休みに外来ホールにおいて、旭川営林支局の職員および医事課の職員立ち会いのもとで、美しい「みどりのさわやかさん」から看護婦さんに手渡されました。



二鉢は外来受付に飾られ、今日も来院する患者さん達の心を和ませております。
(医事課)

【薬剤部】

新薬紹介(2)

エチドロン酸二ナトリウム (ダイドロン錠)

骨にかかわる疾患には、種々の病態があります。そのひとつとして異所性骨化という余り聞きなれない病態が存在しますが、これは本来、骨が形成されてはならない部位、即ち関節周囲の筋肉など軟部組織に骨が

形成されるもので、症状としてその部位に熱感、腫脹、発赤等が生じ、骨化が進行すると、関節が動かなくなります。一般に、脊髄損傷の患者や人工関節置換術後の股関節に多く見られると報告されております。従来、この疾患に対しては異所骨の切除などが行われてきましたが、内科的治療法として導入されたのが本剤であります。生体内における軟部組織のコラーゲンが石灰化されな

原因物質として、Flaschらは、人尿中から無機物であるピロリン酸を発見しました。このピロリン酸は、リン酸カルシウムの結晶化や凝集を抑制する一方、骨からの結晶リン酸カルシウムの溶解を阻止する両面作用を有することが知られております。このためピロリン酸が異所性石灰化の防止と共に、骨溶解の亢進を阻止する目的で臨床応用できないかと考えられました。しかし、ピロリン酸を経口投与した場合、生体内で速やかに分解され、その作用を発揮しないことから、ピロリン酸と同様の作用を有し、しかも加水分解を受けない誘導体の開発が進められてきました。

そこで、ピロリン酸の分解されやすい P-O-P 結合を持つ Bisphosphonate 系化合物に注目し研究を重ねた結果、エチドロン酸二ナトリウムが経口投与で、ピロリン酸と同様の作用を有し、安定であることが確認され、異所性骨化並びに骨ページェット病の治療剤として開発されました。薬理作用は、骨の成分であるリン酸カルシウムの表面に物理化学的に吸着し、骨を構成するハイドロキシアパタイト (Ca(OH)₂) の結晶やその非

結晶性前駆物質の形成、成長（即ち骨の石灰化）、あるいは溶解（即ち骨の吸収）を抑制します。またそのメカニズムとして、骨においては、成長の終了後も絶えず骨の内部で一連の溶解と形成を繰り返す、骨の代謝回転を行っております。そこで本剤はハイドロキシアパタイトに高い親和性を示しその表面に吸着して、破骨細胞の機能を抑制することから、比較的低下用量で骨溶解を抑制し、異常に亢進した代謝回転を抑え、更に高用量になると、骨溶解抑制作用に加えて石灰化抑制作用も同時に発現すると考えられております。

適応症は、先程から述べている異所性骨化の抑制と骨ページェット病で、対象患者は異所性骨化で約八千人、後者の骨ページェット病は変形性骨炎とも呼ばれ、我が国では極めて稀な疾患ということで、現在までに報告された症例は 150〜200 例程度と推定されております。このように事実上のオーファンドラッグとも考えられます。本剤の腸管での吸収率は低く（ヒトでは約 6% と推定）、この吸収率は食物中の Ca 等の金属と錯体を作ることにより低下することから投与前後二時間は高 Ca 食等の摂取を避け、食間に服

用するよう指示されております。投与スケジュールとして、異所性骨化では通常用量で三ヵ月間連続投与し終了する。骨ページェット病では、通常用量の場合は六ヵ月を超えない。また通常用量を超える場合は三ヵ月を超えないこと。そして再投与の場合は少なくとも三ヵ月の休薬期間を置くことが指示されております。主な副作用は腹部不快感、下痢・軟便等の軽度な消化器症状で、全体の発現率は 13.3% と報告されております。

玄関ホールに鯉のぼり

五月五日は「端午の節句」、この節句は平安時代から行われていたが、江戸時代になるといろいろな幟を立て鯉のぼりを吹き流すようになったと云われています。



以上、本剤は異所性骨化の適応症を取得した我が国で初めての薬剤であります。また、骨疾患の中で最も注目されている骨粗鬆症に対しても検討されており、これからの高齢化時代に伴った老化の一現象と考えられている骨疾患に有用な薬剤として期待されます。しかし一度生じた骨化を消滅させる作用がない欠点などについては、今後の研究が待たれます。
(薬品情報室長 藤田 育志)

最近では鯉のぼりを立てている家庭が多く、竹竿に色とりどりの吹き流しやひごい、まごいをつけ風に靡く姿は、春の風物詩でもあります。
本院では開院以来初めて、玄関ホールに鯉のぼりを飾り、来院の子供さんや患者さん達を楽しませて、たいへん好評でした。
この鯉のぼりは、財団法人旭仁会のほか三名の教職員の方から寄贈されたもので、二組は玄関ホールに、他は精神科神経科と小児科の病棟に飾らせていただきました。
(医事課)

査員から、看護の日賞・院長賞などが贈られました。

次は、(ふれあい看護体験)十二日は中学生二十六名、十三日は高校生十名が参加して抽選となりました。(申し込みが多数で抽選となりましたが…)車椅子の移動を体験したり、患者さんとのコミュニケーションが緊張の中にも楽しい体験になったようです。特に高校生は皆看護学校への進学を希望しており、将来当院に就職することを勧めました。

また、(パネル展)も昨年同様、病院玄関ホールで開かれました。『看護婦の四季』というテーマで、新人研修の様子・病棟行事・旅など、春夏秋冬の自然の移り変わりと共に紹介したもので、多くのギャラリを集めていました。

次は、(南極スライド上映)第三十二次越冬隊に参加した施設課の長谷川技官の南極の話聞かせていただきました。遠い南極に夢を馳せながら、すばらしいオーロラやかわいいペンギンに、やすらぎの時間を過ごすことができました。

《手作りの記念カードとワッペン》シンボルマークとメインテーマをプリントした手作りのカードを、十二日の朝食に添えました。このカードは昨年大変好評でしたので、今年も全く同

看護婦確保と看護部内の動きについて

看護職員のマンパワー確保問題について、今程、社会的関心が高められることはありません。当看護部での看護婦不足は、三年度に入り更に厳しい状況でありました。三月退職者が次年度に少しでも延長してもらうため、年度途中の退職が増え且つ充足されないという悪循環を繰り返してまいりました。

看護婦の夜勤回数を減らすために、ICUの看護婦を病棟応援体制で、また、手術部、外来、材料部の看護職員も病棟日勤応援体制をとる等対策に苦慮しました。不足数を補い、看護婦確

保のためにと三年七月に病棟メッセンジャー六時間パート四人を採用しました。看護助手は、看護婦の助手業務を行うことから業務整理改善を図りました。それまでは各NSに一名配置している看護助手が行っており(不在時は看護婦)、調査によるとメッセンジャー業務に要する時間は一日量の殆でした。彼女達が休暇時には材料部パート職員が代行します。看護助手は病棟内で落ち着いて業務を行っています。

十四日・十五日の(看護相談)は、外来受診の方や家族などの療養相談・血圧測定等が行われました。その他、エレベーターホールなどに掲示したプロ顔負けの看護の日のポスターは七西の澤田さんの作品です。ご協力いただいた多くの方々に深く感謝致します。(看護部 総務委員 加藤千津子)

二つ目は、三年十二月から交代制勤務をしている看護婦の乳幼児を対象に、新たに保育英資金貸与制度が設けられたこと。

また、四年度から看護婦の院外研修が大幅に改善されます。看護婦募集は全国的なキャンペーン活動で、道内四

二つ目は、三年十二月から交代制勤務をしている看護婦の乳幼児を対象に、新たに保育英資金貸与制度が設けられたこと。また、四年度から看護婦の院外研修が大幅に改善されます。看護婦募集は全国的なキャンペーン活動で、道内四

方式に切り換えられ業務の省力化につながっています。(調査では病棟全体で一日二十時間を費やしていた。)それから、看護職員の環境改善への取り組みの一つに、三年十一月から準夜、深夜勤務に服するために必要な通勤対応を見直したと。

十校、道外七十四校に及んでいます。その他看護学校卒業生への説明会、求人情報誌、看護雑誌等への広告等々です。四年度に向けて七十三名の応募を得て、救急部の新設による増員など、前年度より十二名増の五十六名を採用することができました。

一、看護業務支援システム(二年十月)で発生源で入力されたデータから、日報・各種ワークシートを作成し、業務の効率化を図るシステムです。従来手書きでやっていた伝票や帳票類が機械の力で省力化と業務改善につながっています。

二年度から他大学との研修を含めての人事交流が始まりました。今年は鹿児島大三名、琉球大三名、神戸大二名、宮崎医大一、秋田大一、弘前大一の十一名です。研修による交流は適度な刺激と緊張を覚えます。当院の看護婦にも交流できる時が早くくることを望んでいます。

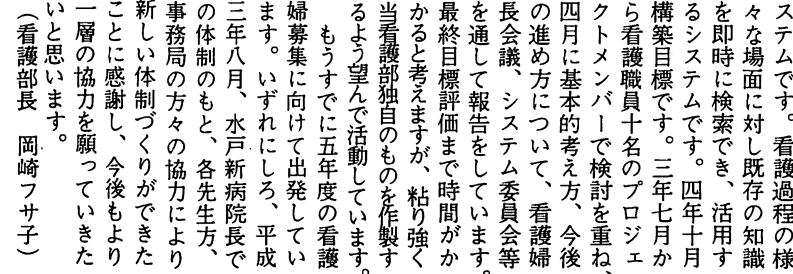
四年度の看護部の取り組みについて記します。全NS対象に申し送りの時間短縮について積極的に検討し

勤務体制の再検討に入っています。ゆとりのある時間と連休がとり易いようにです。

継続的な事項に、医療情報看護システムがあります。看護システムは三本の柱で組み立てています。一、勤務管理支援システム(二年六月)で、勤務スケジュールリング・超過勤務管理、人事及び健康管理において事務的作業の省力化を図っています。

残る一つは、看護支援システムです。看護過程の様々な場面に對し既存の知識を即時に検索でき、活用するシステムです。四年十月構築目標です。三年七月から看護職員十名のプロジェクトメンバーで検討を重ね、四月に基本的考え方、今後の進め方について、看護婦長会議、システム委員会等を通して報告をしています。最終目標評価まで時間がかかると思いますが、粘り強く当看護部独自のものを作製するよう望んで活動しています。もうすでに五年度の看護婦募集に向けて出発しています。いづれにしろ、平成三年八月、水戸新病院長での体制のもと、各先生方、事務局の方々の協力により新しい体制づくりができたことに感謝し、今後とも一層の協力を願っていきたいと思います。(看護部長 岡崎フサ子)

音楽の夕べ(北星中学シンセサイザー部の演奏)



こえくらべ(看護婦さんによるパフォーマンス)

みどりの日に 森林からの贈り物

四月二十九日の「みどりの日」に因んで、旭川営林支局から北海道の代表的な広葉樹であるミズナラ（通称ドングリの木）の鉢植と

春を告げる代表的な草花でもあるサクラソウ科の鉢植の各一鉢が、本院に贈呈されました。

贈呈式は、二十八日のお昼休みに外来ホールにおいて、旭川営林支局の職員および医事課の職員立ち会いのもとで、美しい「みどりのさわやかさん」から看護婦さんに手渡されま



(医事課)

【薬剤部】

新薬紹介(2)

エチドロン酸二ナトリウム (ダイドロネール錠)

骨にかかわる疾患には、種々の病態があります。そのひとつとして異所性骨化というつり聞きなれない病態が存在しますが、これは本来、骨が形成されてはならない部位、即ち関節周囲の筋肉など軟部組織に骨が

形成されるもので、症状としてその部位に熱感、腫脹、発赤等が生じ、骨化が進行すると、関節が動かなくなります。一般に、脊髄損傷の患者や人工股関節置換術後の股関節に多く見られると報告されております。従来、この疾患に対しては異所骨の切除などが行われてきましたが、内科的治療法として導入されたのが本剤であります。生体内における軟部組織のコラーゲンが石灰化されな

い原因物質として、Flaschらは、人尿中から無機物であるピロリン酸を発見しました。このピロリン酸は、リン酸カルシウムの結晶化や凝集を抑制する一方、骨からの結晶リン酸カルシウムの溶解を阻止する両面作用を有することが知られております。このためピロリン酸が異所性石灰化の防止と共に、骨溶解の亢進を阻止する目的で臨床応用できないかと考えられました。しかし、ピロリン酸を経口投与した場合、生体内で速やかに分解され、その作用を發揮しないことから、ピロリン酸と同様の作用を有し、しかも加水分解を受けない誘導体の開発が進められてきました。

そこで、ピロリン酸の分解されやすい P-O-O-P 結合を持つ Di-phosphonate 系化合物に注目し研究を重ねた結果、エチドロン酸二ナトリウムが経口投与で、ピロリン酸と同様の作用を有し、安定であることが確認され、異所性骨化並びに骨ペーজেット病の治療剤として開発されました。薬理作用は、骨の成分であるリン酸カルシウムの表面に物理化学的に吸着し、骨を構成するハイドロキシアパタイト (Ca(OH)₂) の結晶やその非

結晶性前駆物質の形成、成長（即ち骨の石灰化）、あるいは溶解（即ち骨の吸収）を抑制します。またそのメカニズムとして、骨においては、成長の終了後も絶えず骨の内部で一連の溶解と形成を繰り返す、骨の代謝回転を行っております。そこで本剤はハイドロキシアパタイトに高い親和性を示しその表面に吸着して、破骨細胞の機能を抑制することから、比較的低下量で骨溶解を抑制し、異常に亢進した代謝回転を抑え、更に高用量になると、骨溶解抑制作用に加えて石灰化抑制作用も同時に発現すると考えられております。

適応症は、先程から述べている異所性骨化の抑制と骨ペーজেット病で、対象患者は異所性骨化で約八千人、後者の骨ペーজেット病は変形性骨炎とも呼ばれ、我が国では極めて稀な疾患ということで、現在までに報告された症例は150〜200例程度と推定されております。このように事実上のオーフアンドラッグとも考えられます。



用するよう指示されております。投与スケジュールとして、異所性骨化では通常用量で三ヵ月間連続投与し終了する。骨ペーজেット病では、通常用量の場合は六ヵ月を超えない。また通常用量を超える場合は三ヵ月を超えないこと。そして再投与の場合は少なくとも三ヵ月の休業期間を置くことが指示されております。主な副作用は腹部不快感、下痢、軟便等の軽度な消化器症状で、全体の発現率は13.3%と報告されております。

玄関ホールに鯉のぼり

五月五日は「端午の節句」、この節句は平安時代から行われていたが、江戸時代になるといろいろな職を立て鯉のぼりを吹き流すようになったと云われています。最近では鯉のぼりを立てている家庭が多く、竹竿に色とりどりの吹き流しやひごい、まごいをつけ風に靡く姿は、春の風物詩でもあります。

本院では開院以来初めて、玄関ホールに鯉のぼりを飾り、来院の子供さんや患者さん達を楽しませて、たいへん好評でした。この鯉のぼりは、財団法人旭仁会のほか三名の教職員の方から寄贈されたもので、二組は玄関ホール、他は精神科神経科と小児科の病棟に飾らせていただきました。

(医事課)

（薬品情報室長 藤田 育志）

疲労を御披露



今日から社会人だ、と意気込んで病院に来る様になつて、やつと四週。いや、もう四週。何だかんだで約一ヶ月経つた。

周囲の環境は今までと比べるとうずいぶん変わった。当たり前前の様だけれど、ナースステーションは女だらけだし、生命保険のセールスマンは来るし、製薬会社の社員さんには挨拶されるし、患者さんは先生と呼んでくれるし。全く、形だけは医者そのものだ。

でも、実際の所、心理構造は学生時代のままで。社会的思考回路はまだ出来ていない。学生の思考回路と社会人のそれがどう違うんだ、と聞かれると答えられないけれども、何となくそんな気がする。学生の時はふわふわと沢山の夢がいくらでも浮かぶ。社会人になると殆んど夢が沈没してしまふ。所謂、現実の壁というやつだ。

この壁のせいで、今ほと

ても疲れてしまふ。特別仕事がつきついこともないし、周囲がきびしいということもないのに。さあ点滴だ、注射だ、ギブスをまくぞ、消毒するぞ、カルテを書か

にや、おつと手に針さした、コンピュータ入力だ、昼飯食うぞ。どれもこれも現実そのまんまだ。これがなかなか巧く出来ない。昼飯食うのはプロだが、

原田助教教授が、新入医局員歓迎会で、「時間を巧く使え」という話をされた。時

間は知らぬ間に過ぎてしまいうし、遅い様で速いし遅い様で遅い。これもまた現実だ。今まで時間を意識したことなど全然なかったが、時間を意識せざるを得なくなった。遅刻は出来ないし、エスケープも不可能、ええい休んじまえ、というのもちよつと無理だ。常に気ぜわしくてやつぱり疲れてしまふ。

したことはない。先生方はやつてる内に慣れてくるよと言ってくれるが、フレッシュな我々にはいつまでも続くかの如く感じられてしまふ。

またまりのない文章になつてしまつたが、要するに言いたい事は、毎日ヒーヒー言いながら病棟をうろうろと歩き回っているという事だ。これからもまた、うろうろと医大病院や各方面を訪れて、あたふたとまとまりのない事をやつたり言つたりすると思う。そういう時は、暖かい目で見つつ厳しく示唆して欲しい。そして、バリバリの医師へと成長することが、今の壁をぶち破る一番の方法だと考えている。

Fresh Voice

看護婦になつて



就職して二ヶ月が過ぎようとしてゐる。まだ、緊張しながら毎日を過ごしている。就職後一ヶ月は、特に

わからないことばかりで本当に私は看護婦としてやっていけるのか不安で仕方なかった。また、私の場合初めて親元を離れて看護婦舎での生活が始まつていた。初めは、食事ひとつ作るのが楽しく自分一人だけの家具類、電気類が真新しく嬉しかった。しかし、今は旭川へ来てまだ二ヶ月なのに

そんなうかれ気分もいつのまにかどこかへ消え去つてゐる。国家試験に無事合格し、嬉しさと同時に責任という重みを感じた。合格後初めて、「看護婦さん」と呼ばれてまた違う緊張感を覚え、まだ学生気分のぬけきらなかつた私にもだんだん看護婦としての自覚がでてきたように思う。五月に入り、ドキドキし

ながら初めての夜勤をし、

何度か頭が真っ白になりながら申し送りを行った。夜勤の間は、いつ寝ていつ食事をしたらいいのだろうとボーと考えていると過ぎていくものだということを知つた。そのあと、一人立ちの夜勤がやつて来てもつとドキドキした。

今、私は患者さんのひとつひとつの言葉が励みになっている。まだ、反対に患者さんに支えられていることの方が多くに思う。何をやるのにも時間がかかり、できれば動けない自分が情けなく、辛く思うときがある。しかし、それが今の自分で今後変わつていく。そして、わからないことが多い分、学ぶことが多い成長しているのだと思ふ。また、自分の行動の意味を十分理解して動いていないように思う。それに、患者さんの話をゆつくり聞いたりその人に合った看護を考えている余裕はまだない。今後は、疾患、看護について受け持ちの患者さんから少しずつでも勉強して、責任を持つて行動していきたい。心にゆとりを持ち、患者

貸出物品の紹介

庶務課職員係では、次の物品を共有物品として保有し、職員に貸し出していただきますのでご利用ください。

- 一、野球・ソフトボール道具一式(グラブ、ボール、バット、ミット、マスク、ベース)
- 二、ラケット及びボール(テニス、卓球、バドミントン)
- 三、キャンプ用具(テント、寝袋、ライト)
- 四、バレーボール
- 五、クレーンボール
- 六、マジャンパイ
- 七、ゴルフクラブ
- 八、綱引き用ロープ
- 九、スキー板、スキー靴

なお、数に限りがありま

すので、事前に電話(二二二六、二二二七)で問い合わせ願います。

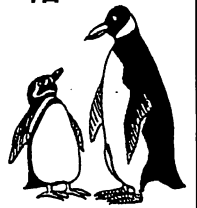
また、利用の際は、印鑑を持参の上、管理棟二階庶務課職員係で申込手続きをしてください。(庶務課職員係)



シリーズ

南極四〇〇日

長谷川 裕



1

本号から四回のシリーズで、本年三月に帰国した第三十二次南極地域観測越冬隊・機械担当隊員 長谷川 裕技官(施設課)の南極での貴重な体験手記を掲載します。

平成二年十一月十四日、第三十二次南極地域観測隊は、大勢の関係者が見送る中、海上自衛隊が運行する砕氷艦「しらせ」に乗り込み、快晴の東京・晴海港を地球の底、南極・昭和基地めざして出発した。

私は、設営部門機械(電気)担当として、基地の電気設備保守、管理を行う。出発二週間後、寄港地オーストラリア・フリーマントルに着く。ここで一年間の越冬に必要な新鮮な野菜、食料の数々を積み込んだ。

私、設営部門機械(電気)担当として、基地の電気設備保守、管理を行う。

十二月九日、南緯五十八度、生まれて初めてこの目で紺碧の海に青白くかがやく「冰山」をみた。(とうとう来た、南極に来了。)

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。

「三十マイル拠点」には、輸送に使う雪上車八台、ブルドーザ二台

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。

そう実感した。このころから、ポツリポツリと浮かんでいた海水が徐々に密集してきた。

ヘリが、ゆっくりと雪煙を舞い上げながら雪面に降りた。ドアが開き「エイッ」と飛び降りた。感激のあまり目がうるむ……。

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。

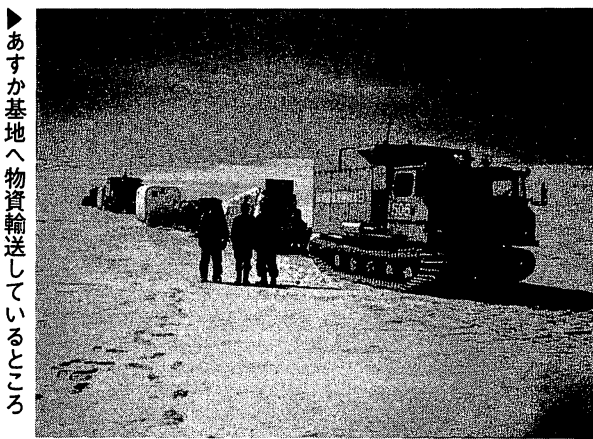
越冬中の案しみはなんと、いっても食料とアルコールと聞いていたが、我隊の酒類積み込みもなんと七トンにもなった。

十二月三日、フリーマントル港を出発。途中、南極を目指す者が必ず通らなければならぬ(南緯四〇度、さけぶ五〇度、恐怖の六〇度)

「しらせ」は、厚さ二m程度の定着氷をゆつくりではあるが連続砕氷できる。しかし、それ以上になるといったん後退させ氷に体当たりし、船の重みで氷を砕いた(これをチャーピングという)。厚さ五mの氷になると三回のチャーピングで十m進むのがやっと、という時もあった。とにかく、「しらせ」はどんなことをしても、越冬交代を待つ三十一次隊がいる昭和基地、あすか基地に行かなければならぬのである。

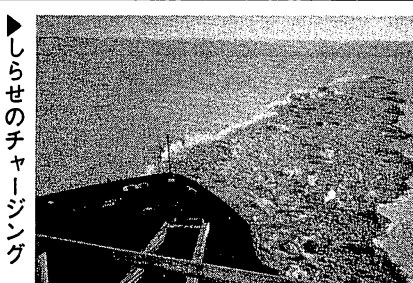
「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。



あすか基地へ物資輸送しているところ

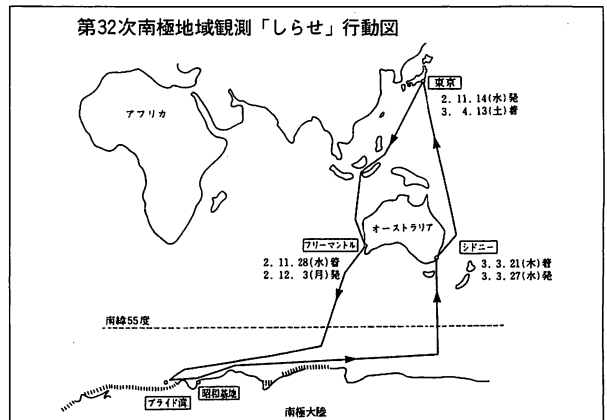
十二月三日、フリーマントル港を出発。途中、南極を目指す者が必ず通らなければならぬ(南緯四〇度、さけぶ五〇度、恐怖の六〇度)



しらせのチャーピング

十二月二十一日、我々の初仕事は、昭和基地から約六百七十km離れた、あすか

「この白い大陸に、日本で学んできた生活方法、そして機械力はどれだけ通用するのだろうか。」不安と緊張は高まるばかりであった。



第32次南極地域観測「しらせ」行動図

東京 2. 11. 14(水)発 3. 4. 13(土)着
フリーマントル 2. 11. 28(水)着 2. 12. 3(月)発
シドニー 3. 3. 21(木)着 3. 3. 27(水)発
南緯55度
アタゴラ海
昭和基地
南極大陸

設以来三十数年が経過し老朽化した建物の見直しとして建てられる、四階建ての管理棟建設(三十二次隊は二階まで担当)、基地で使う燃料備蓄タンク建設、重力観測用の重力計室建設、ブルドーザ組立、基地外灯工事など、数々のオペレーションを限られた人数(越冬隊、夏隊そして「しらせ」乗員の支援、合わせて約五十名)で、一ヵ月半の間に終了させるのである。

限られた人数のため、何でもやらなければならぬ。医療担当のドクターは生コンの調査責任者、通信士は型枠大工さん、地震観測の先生は高い所に上がって為た具合。太陽が沈まないの時間感覚がなく、夜中まで働く。(今思うとよくやった、やれたなあ、と思う)二月一日、ようやく太陽



▲へりから見た夏の昭和基地

▲越冬交代式の一コマ



が二時間程沈むようになってこの日、越冬交代式を迎えた。いよいよ我々三十二次隊が、三十一次隊に代わって昭和基地の観測業務を行うのである。

式では三十一次隊の晴ればれした顔、それとは対照的に、笑いの中にも引き吊った表情がうかがえる三十二次隊のメンバーの顔があった。三十分程でセレモニーは終わり、三十一次隊は日本に帰る「しらせ」に乗り込んだ。

二月七日、昭和基地沖に停泊していた「しらせ」は、ポオーと長い別れの汽笛を残して氷山の陰に消えて行った。もう、帰りたいくても帰る手段がない。今日から三十一名の越冬生活が始まった。(つづく)

職員としての山と登山者としての登山者

職員山の会

職員山の会(別称翌々榎)は昭和四十九年、数名の有志により始められました。以来今日まで、多少の増減を繰り返しながら、現在四十名余りの会員を有する会となっております。

活動としては、四月から十一月までの毎月一回の月例山行と十二月のサンロク山(夜更けに登る山です)での総会、会報の発行などがあります。月例以外は、会員各人が個人山行をおこなって、会報にその活動ぶりがよせられています。翌々榎会(あさ

知りませんが「名は体を表す」という感強しです。

また、山登りには酒が付きものだというのがこの山の会の常識で、山行計画をたてる時に、必要装備のひとつに必ず「登頂乾杯用ワイン」他、アルコール類がリストアップされるのが常なのです。泊りの山行では、ただでさえ重い荷物に、さらに水を背負って行くのです。ただ場所を変えて飲んでもうだけだ。という自嘲気味の意見を言う会員もいます。朱に交わって朱

適切なことばがみつからないのですが、思いきり汗を流した後に飲むビールは美味しきは筆舌につくしがたいものがあります。地上では食べる気にならない「マルちゃんのダブルラーメン」も山の上では、極上のラーメンに変わります。

……ともかく、自然の真つ只中で、汗を流し、さわやかな空気をたっぷりとすって、談笑す



▲クワンナイ川遊行

▲芦別岳山頂



ることは、日頃のストレスを解消しておつりがくるほど、元気ももたええます。健康にいいことをやるのが今の社会のひとつの流行のようになってい

ますが、山登りは、古くて新しい健康的なスポーツであると思えます。森林浴も、エアロビック運動(有酸素運動)も、ウォーキングも、バードウォッチングも、オリエンテーリングも、色々な要素が一度の山行のなかにすべて含まれています。ふだんは使わない(?)知力、動物的



▲日高の山々

カンも使います。体力がなくて山登りはちよつと……と思つている方も、一度参加されてはいいかがでしょうか。その魅力がわかれば、体力も徐々に……についてくることでしょう。

参考までにこれからの山行予定を挙げておきます。

六月旭岳―中岳―裾合平、七月富良野岳三峰山沢、八月沼の原―トムラウシ山、九月日高幌尻岳、十月ペテガリ岳、十一月ピンネシリ山、以上の予定になつていきます。興味をお持ちの方は学生課の伊藤(内線二二〇七)または高坂(内線二二〇五)までお尋ねください。(会員 田淵久仁子)

米国ワシントン大学 医学部附属病院に 留学して

私は平成元年から平成三年七月までの二年間余、米国ワシントン大学医学部内科に留学する機会が得られました。ワシントン大学は米国北西部のワシントン州シアトル市にあります。周辺諸州(アイダホ・モンタナ・アラスカ)に医学部がないため、その医学部附属病院は北西部を代表する医療機関として機能していました。また、医学部・薬学部・看護学部を合わせたヘルスサイエンスセンターの一角を占めていました。私の留学先は代謝・内分泌・栄養学科で、E・L・BIERMAN教授に師事しました。この学科の研究テーマは、糖尿病・高脂血症・動脈硬化症ですが、私は脂肪負荷後の糖尿病患者の中性脂肪(TG)リッピンポロテイン)が動脈硬化性であることを明らかにするため、糖尿病患者に脂肪負荷テストを行い、得られた血漿リポ蛋白とマクロフィージとのインターラクションをみる研究に従事しました。

留学して間もなく、一人の患者に40%脂肪を含む千カロリーの脂肪食を早朝空腹時に負荷し、二時間毎に採血、八時間で終了というテストを実施することになりました。実施場所は附属病院七階南病棟で患者には一日入院してもらいました。

この七階南病棟はCRC(クリニカル・リサーチセンター)と呼ばれ、NIHによって全面的にサポートを受けた病棟で八人余のナースと十五ベッドが配置されています。全米各地にCRCがあるといわれ、米国の臨床研究に対する熱意と資金の豊富さに感心しました。

さて、テスト前には必ず



教授が病棟に来てくれて、患者からInformed Consentを取ってくれました。何故この検査が必要か、どのような検査なのか、あなたにとってその臨床的メリットは何か、このような危険性もあるテストだとか、患者が納得するまで説明している姿には感銘しました。

説明時間は長い場合で四十五分という患者がいたのを覚えていますが、日本でも最近、Informed Consentが認識されつつあるようです。滞米中計二十人程の患者に負荷テストをしました。が、何度か、教授不在のときがあり、私が下手な英語を駆使して説明し承諾書にサインしてもらったことがあります。この事は今思い出しても冷や汗が出ます。米国の女性には強いと聞いていました。ナースはこわい人ばかりだと思っていました。この病棟のナースは親切で明るく、強いプライドをもって仕事に従事していました。米国人の特質なのでしょう。常に笑みを絶やさない態度には感心させられました。このスタッフも患者も九割は白人系でしたが、差別を受けたこともなく、非常に仕事やり易かったと思います。

教授は朝説明した後病棟からいなくなり、その後八

「翌日には、友人とドライブに行く予定であった。明日のため、ガソリンを補給しに行く途中であった。夜も遅く、早く帰りたいと思う気持ちと、私の車の前後に他の車両がいなかったという状況が私にアクセルを踏み込ませた。間もなくスピード警報のチャイムが鳴り始めたので、出し過ぎと感じアクセルをゆるめた。その瞬間、前方に人影らしいものを発見し、慌ててブレーキを踏んだが間にあわず衝突……」

「……車を運転し、会社に戻る途中でした。その時、手前の信号が青から黄色に変わりましたが、私は前方の車がそのまま進行すると思いい、その後には続きました。時間、二時間毎にナースと採血するのですが、患者やナースからよく話しかけられました。しかし、私の英語力では会話が充分成り立たず、苦しい思いをしました。患者の中には日系米人や元駐留米人がいて、思い切り日本語で会話したのも懐しい思い出です。

また、ハロウィーンの日(十月三十一日)には、病院のスタッフが魔女など

しかし、前方の車は止まったのです。私はその車を避けようとして急ブレーキをかけハンドルを切りました。間にあわずぶつかり、そのまま歩道へも突っ込み……」

これらの文書は、「ある日突然に」私の叫びを無にしないで(財団法人北海道交通安全協会発行)から抜粋した一節です。

これらは、交通違反が事故発生の元となっており、交通刑務所に収容された人達の非痛な叫びがまとめられています。

振り返って本学では、昨年来、北海道警察旭川方面本部から教職員、学部学生及び大学院学生(以下「教職員」という。)の交通違反等の通告が後を絶ちませに塗装して仕事しているのを見てたまげたこともありました。

とりとめのないことを書いてしまいましたが、異文化の地に住み、貴重な経験をすることができました。このような機会を与えて下さいました本学の諸先生に心から感謝したいと存じます。

(第二内科 助教 衛藤 雅昭)

- ん。また、過去に教職員等の大きな交通事故の事例があったことは、周知のとおりです。交通ルールを守り、安全運転の心構えを持ちましょう。
- 「安全運転五則」
- ・安全速度を必ず守る。
 - ・カーブの手前でスピードを落とす。
 - ・交差点では必ず安全を確認する。
 - ・一時停止で横断歩行者の安全を守る。
 - ・飲酒運転は絶対にしない。
- (庶務課職員係)
- 平成四年度
『病院ニュース』
編集委員
- 委員長 八竹教授 (泌尿器科)
 - 委員 衛藤助教 (第二内科)
 - 原田助教 (整形外科)
 - 大神助教 (脳神経外科)
 - 信岡技師長 (検査部)
 - 藤田薬品情報室長 (薬剤部)
 - 新井副看護部長 (看護部)
 - 木下課長補佐 (庶務課)
 - 佐々木課長補佐 (医事課)